

世界が尊敬した日本人⑧

百年に1人の情報戦略家・児玉源太郎

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

日露戦争(1905)の勝利というと、東郷平八郎や乃木希典らの指揮官にスポットが当たりがちだが、最大の立役者は何といっても児玉源太郎である。

各戦闘での陸軍、海軍の活躍と勝利、軍資金(国債)を外国為替市場で集めた高橋是清の手腕も見すごせないし、金子堅太郎、伊藤博文、桂太郎らの政治家、外交家もそれぞれの持ち場で力を発揮した。

しかし、戦争に勝つための情報の重要性を一番よく知っていたのは児玉であり、開戦、用兵、作戦、補給から講和までのすべてをお膳立てした総合戦略プロデューサーであった。

世界の軍事専門家の多くがロシアの勝利を予想する中で、日本の陸軍を指導し児玉の逸材ぶりをよく知るドイツ陸軍名参謀メッケルはただ一人、「児玉がいる限り日本が勝つ」と断言し、ドイツの新聞人を驚かせた。

日露戦争が風雲急を告げると、児玉は自ら買って出て台湾総督・内務大臣から二階級降格して参謀本部次長につき、その全戦略を立案した。戦端が開かれると、大山巖現地軍総司令官の下で総参謀長になって戦争を直接指揮した。

児玉は「来るべき日露戦争は情報戦争である」との認識を持っていた。当時、最先端の無線通信技術をいち早く導入した。

戦場と大本営、東京に国際通信網を引くため海底ケーブル布設船「沖縄丸」を英国に発注、九州南端の大隅半島―沖縄―石垣島とを結ぶ長距離海底ケーブルを明治30年までに完成、明治36年には当時、世界で二番目に長い佐世保―東京間に直通電話回線を開通した。

さらに佐世保から朝鮮半島まで海底ケーブルを布設した。

こうして、戦争開始までに台湾、北方領土から朝鮮まで無線装置と電話、電信の情報通信網が完成し、広大な戦場の情報は即座に中央に届くシステムを構築した。

外国の支援を全く受けずケーブルを布設し、無線通信を発明したマルコニーの実験からわずか一年後に電信機の製造開発をやり遂げたのに各国は驚嘆した。

「バルチック艦隊迫る。日本海決戦か！」の直前に、対馬、日本海周辺に海底ケーブルが完成し、幾重にも無線望楼や無線電信機が設置された。艦船群にも無線機をつんで迎え撃つ情報体制が整った。

明治三七(1905)年5月27日午前2時45分、「信濃丸」が「敵艦見ユ」と打電し、旗艦「三笠」や軍令部にはわずか二十分後に着電し、勝利をつかんだのは無線電信の威力であった。

陸戦でも児玉の作戦は的中する。旅順・203高地で乃木司令官は肉弾戦を繰り返して、屍の山を築きながら、総攻撃に失敗する。児玉は東京湾の要塞に据えられた巨砲28センチ榴弾砲をはずして持っていくように指示、明治36年12月に自ら乗り込んで乃木の第三軍の指揮をとった。

28センチ榴弾砲や重砲数十門で難攻不落を誇った203高地を一斉に集中砲撃、わずか数日間で陥落させた。こんどは203高地から見下ろせる旅順港内に封鎖されていたロシア艦を28センチ榴弾砲で全滅させた。東郷指揮下の連合艦隊が後顧の憂いなく、バルチック艦隊を迎え撃てたのもこのせいである。

児玉のすごさは開戦前からどのタイミングで兵を引くか絶えず考えていたことだ。桂太郎首相の秘書官・中島久万吉に「桂は忙しいので君と電報で打ち合わせよう」と暗号電報を作り、戦争中もことあるごとに「戦争を止める何か具体的な情報はないか」と催促していた。

戦争終結の機会がつかんだら、「自分が軍は全責任をもってとりまとめるから、すぐ講和に入ってくれ」と、中島にも度々お願いしていた。その通り全軍を掌握し、見事に兵を収めたのである。

「兵を引くことを知らなかった」東条英機をはじめアジア太平洋戦争での軍人指導者たちの無定見、戦略、戦術、統率力の欠如、無能力と比べると雲泥の差である。児玉は日露戦争で精魂使い果たしたのか、戦後2年後に55歳の若さで急死した。